

スケッチのすすめ

滝沢 具幸

スケッチブックはルネサンスの頃から使われ始めたと聞く。地塗りした紙葉を綴じたもので、レオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェロも用いたのではないと思う。デューラーやドラクロア、モローや多くの作家のスケッチや習作は作家の息遣いが感じられて魅力がある。

スケッチブック片手に野山に出て、自然の風の中で森や田園、水の流れや山の姿など気軽にスケッチするのは楽しい。旅での写生も良い。心に触れる形や色彩を感じるままに描くのである。スケッチには臨場感が自ずと表れる。雨の日も良い。凍てつく原野、その時でなければ捉えられない情景もある。

スケッチブックは画家や建築家、デザイナーなどの造形に携わる者だけでなく、自然科学者や地理学者などもよく用いている。フィールドノートというものがある。硬表紙の小さなスケッチブックで野帖ともいわれる。細かい罫が引かれたノートは虫や植物などの計測記録にも役立つ。私は最近学生に「発見ノート」と名付けた小型のスケッチ帖を持つことを勧めている。小さなノートを手元に置いて、日々の生活の中で発見した美しい自然のフォルムやその印象、イメージなどを記録するものである。肩肘を張らないでふと目にしたものの中に思わぬ新しい発見があり、それが創作の原点となる。

島崎藤村が「千曲川のスケッチ」の中

で、小諸での生活を描いた情景は目に見えるように美しい。藤村の優しい目を感じる。また、寺田寅彦の随筆「柿の種」は日常の暮らしの中にあたたかいまなざしを感じるスケッチ集と言ってもよい。ごく普通に見られる物理現象の中に科学の発見があるという寅彦の気持ちが伝わってくる。パウエル・クレーはパウハウスで行った学生への講義を「教育的スケッチブック」としてまとめた。線描デッサンと簡単な説明の中に重要な造形理論が含まれている。パウエル・クレーの脳裏に浮かんだ造形的発想のスケッチである。

インフォメーション ⑨→⑪月

●美術博物館

お問い合わせ：0265-22-8118

◎特別展

江戸南画の潮流Ⅱ
—文晁・華山の新感覚— 10/11(土) → 11/9(日)

◎企画展および特別陳列

ハナノキ湿地の自然史 → → 10/13(月)
—赤き楓のかなでる交響楽—

伊那谷の仏教絵画 → → 10/5(日)
—聖徳太子絵伝と真宗の宝を集めて—

富草の化石 10/25(土) → 2/15(日)
—近藤コレクションを中心に—

◎平常展示

菱田春草をめぐる画題のイメージ 第4回「荘重」 → → 10/5(日)

菱田春草をめぐる画題のイメージ 第5回「雄快」 11/15(土) → 12/23(火)

華やぎのうつわ 11/15(土) → 2/15(日)
—青花と五彩—

◎プラネタリウム

秋の番組「秋の星座と春草」 → → 11/30(日)

◎講演会

「ハナノキ自生地の地質と地形 —シラカブ・ヒトワガコと関連させて—」 9/13(土) 14:00~
講師：糸魚川淳二氏

「中世説話画研究の可能性 —真宗絵伝を中心に—」 9/14(日)・15(月) 13:30~
講師：小山正文氏
報告：扇野佳世子氏・藤原重雄氏

「遠山谷南部の民俗」 9/23(火) 13:00~
講師：野本寛一氏

江戸南画の潮流Ⅱ・特別講演会 10/26(日) 13:30~
講師：安村敏信氏

◎美博特別講座「美」の創造と発見

第3回 中世絵画 講師：米倉迪夫氏 9/14(日) 13:30~

◎自然講座

南アルプスの地形・地質の魅力 9/18(木) 19:00~
講師：村松武(当館学芸員)

下伊那にひそむ樹木 —フモトミズナラって何?— 9/27(土) 13:30~
講師：星野義延氏(東京農工大学准教授)

忠犬が農地を守る 10/18(土) 13:30~
講師：末松正文氏(南木曾町職員)・伊藤兼彦氏(農家)

天竜川の野鳥たち 11/9(日) 13:30~
講師：鷺田俊一氏(三種小学校教諭)

大地が引き裂かれてできた根羽火山 11/15(土) 13:30~
講師：坂本正夫(当館専門研究員)

◎美博文化講座

真宗と聖徳太子信仰 9/30(火) 19:00~

金座御金改役 後藤三右衛門の生涯 10/5(日) 13:30~

飯田下伊那地方の住まい 10/17(金) 19:00~

宗祖たちの面影 10/28(火) 19:00~

養蚕の民俗 11/14(日) 19:00~

仏像の荘厳 11/18(火) 19:00~

飯田町と藩士の暮らしぶり4 11/30(日) 13:30~

◎子ども博物館くらぶ

子ども美術学校 9/27(土)・10/25(土)・11/15(土) 13:00~

科学工作教室

・ソーラーカーを作って走らせよう 11/8(土) 9:30~

宇宙をのぞこう —親子で学ぶ天文講座—

・太陽の黒点を探る 10/11(土) 15:00~

・秋・冬の星座と星座ものがたり 11/29(土) 15:00~

◎星空観察会

秋の星座と流星群・変光星 10/21(火) 18:30~

◆臨時休館日

10/7(火) - 10(金)・11/11(火) - 13(木)

●上郷考古博物館

お問い合わせ：0265-53-3755

◎企画展

風越山麓の考古学 10/18(土) → 11/30(日)

◎講演会

秋季展示講座「風越山麓の考古学」 11/9(日) 13:30~

◎展示解説会

10/25(土) 13:30~・29(土) 14:00~

◎下伊那歴史探検隊

10/19(日) 9:00~

◆臨時休館日

10/16(木) - 17(金)

●追手町小学校 化石標本室

お問い合わせ：美術博物館へ

◎公開日

9/21(日)・28(日)・10/12(日)・26(日)
・11/16(日)・23(日) 10:00~16:00

◎化石クリーニング

9/28(日)・11/16(日) 10:00~16:00

◎化石レプリカ作成

9/21(日)・10/26(日) 10:00~16:00

2008 VOL.080

テラス

◎飯田市美術博物館ニュース◎

IIDA CITY MUSEUM NEWS "TERRACE" VOL.080
http://www.iida-museum.org/



江戸南画の潮流Ⅱ

— 文晁・華山の新感覚 — ① 10/11(土) → 11/9(日)

江戸幕府のお膝元であった江戸画壇は、17世紀初頭の江戸開府より100年余り、御用絵師として活躍した狩野派の支配下にありました。しかし、18世紀半ばの江戸時代後期に至り、南蘋派など新来の絵画を取り入れた新たな画派が開かれました。それが江戸南画です。強固な徒弟制度による画壇支配と、粉本主義による画風の画一化を図った狩野派に対し、江戸南画の作家達は、自由な気風の中で様々なジャンルの絵画を取り込み、新しい息吹を江戸の画壇に吹き入れました。その手本となったのは、日本の南画の起源となった明清絵画をはじめ、宋元絵画に代表される漢画、南蘋派などの写実風絵画、さらに西洋技法などでした。時に「折衷派」と称され、独自性の欠落を指摘されることもある江戸南画ですが、その作品には、それぞれの作家達の新しい感覚と個性を見いだすことができ、数十年後にひかえた近代の到来を予

測させる気風に満ちているといえます。特に、江戸南画の代表作家である谷文晁や渡辺華山が登場して以降、西洋から流入した科学的な理念も取り入れられていきました。当時の南画は、まさに個性発露の絵画であり、自由な作風を生み出していったのです。本展では、まず、関東の地で早くに南画に親しんだ中山高陽、林十江、立原杏所、さらに南蘋派に学んだ宋紫石や諸葛監など江戸の新興気風を生み出した作家達を紹介し



①「奥の細道」 渡辺華山 個人蔵

さらに、その先進的な眼で江戸画壇の様相を一変させた谷文晁、渡辺華山、椿椿山等の新感覚を確認し、また、飯田下伊那地方出身で、江戸南画との関連を持った佐竹蓬平、鈴木芙蓉、大平小洲の作品を検証しながら、その影響関係を明らかにしていきます。(横村)



①「四愛園」 椿椿山 天保13年(1842) 栃木県立美術館蔵

伊那谷の仏教絵画

— 聖徳太子絵伝と真宗の宝を集めて — ② 9/6(土) → 10/5(日)

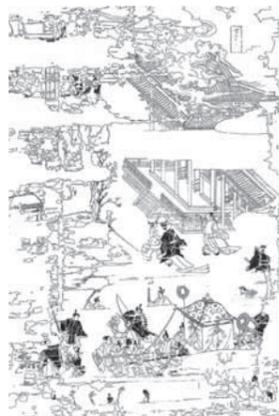
近年、飯田下伊那や木曾地域において、(浄土)真宗ゆかりの中世絵画が相次いで発見されています。親鸞(1173-1262)を宗祖とする真宗教団は国内最大規模の宗派であり、長野県内でも親鸞の高弟たちの建てた有力寺院が多くありますが、飯田下伊那における真宗寺院の数はそれと比べるとわずかです。しかしこの地で見出されてきた真宗ゆかりの絵画はいずれも本願寺八世の蓮如(1415-1499)以前の初期真宗教団のなかで受容されてきたものであり、早くから真宗を受け入れてきた基盤がこの地にあって、真宗の草創期を知るうえでも見過ごすことができません。聖徳太子の生涯を描いた大画面の絵画作例である聖徳太子絵伝(飯田市宮ノ上太子堂伝来)もまた初期真宗の

重要な遺品と考えられます。傷みが激しいために修復されてもお肉眼では描かれた内容が確認できないほどでしたが、このほど学習院大学の「中世掛幅縁起絵の総合的研究」プロジェクトと当館との共同作業によって本

風越山麓の考古学

③ 10/18(土) → 11/30(日)

飯田市街地の背に美しくそびえる風越山。越山を望みながら、雨乞いの祭りをしたのでしょうか。また再生を祈りつつ大事な人を弔ったのでしょうか。近年の発掘調査での新資料もくわえ、風越山信仰との関連を探ります。また、丘の上地区では、飯田城や城下町の調査から江戸時代の町の人々の暮らしが明らかになって



②「聖徳太子絵伝」(部分トレス図) 鎌倉～南北朝時代 本館蔵



③土坑遺物 城下町出土



③「水滴」 城下町出土

②「阿弥陀如来像」 室町時代 本館蔵



④「ハナノキ湿地の自然史」会場入口風景



ハナノキ湿地の自然史

— 赤き楓のかなでる交響楽 — ④ 7/19(土) → 10/13(月)

ハナノキはカエデ科の樹木です。現在日本にしか分布しておらず、日本でも岐阜県東部から長野県下伊那地方南西部に分布が集中する大変めずらしい樹木です。ハナノキは生きた化石といわれ、祖先種が約2300万年前に東アジア、ヨーロッパ、北米大陸に広く分布していました。この頃は地球の気温が現在よりも10℃以上暖かかったのですが、その後の気温の低下に伴う分布の変化によって分布域が狭くなり、現在この地域に何とか生き残っているのです。北米東部には、ハナノキに近いアメリカハナノキが残存しています。ハナノキのイメージカラーは赤です。春に咲く花も赤、葉の芽吹きも赤、秋の紅葉もこれまた見事な赤!

英語では Japanese Red Maple (日本の赤いカエデ)と呼ばれています。この樹を一目みると、何だろうこの樹は、とだれもが思うにちがいがありません。特徴ある葉と樹皮。ただ、いかんせん人目につくほどの樹木はひろがっていませんし、数も多くありません。このカエデ科の樹木は、飯田市のごく一部の地域に生えています。この樹木の強烈な個性、伊達ではありません。6500万年もの歴史を含み、この樹と出会った植物もまた個性派ぞろい。この魅力あふれる樹木と生育場所となる湿地が、人知れず消えてしまわないように、皆さまにご紹介しておかなければなりません。



④「ハナノキ湿地の自然史」展示風景



④ワークショップの様子

●生育環境 ハナノキは、主に湧水がもたらした湿地に細々と生育しています。このような湿地は栄養分が少なく、多くの植物の生活にとっては厳しい場所ですが、ハナノキにとっては貴重な生育場所になっています。このようなハナノキの生育場所は人里近くに存在するため開発の危機にさらされやすく、たぐいでさえ少ない生育地をさらに減らしてきました。このことから、現在絶滅が危惧されています。ハナノキの保全を考える際には、この湿地の環境とセットで考えなければなりません。

●生態 ハナノキは、イチョウのように花粉を飛ばす雄の木と種をつける雌の木にわかれています。どちらも毎年3月末から4月初旬にかけて紅色の花を枝いっぱいに咲かせます。雌の木はプロペラ状の実をつけ、5月には飛ばしますが、種は翌春に発芽します。ハナノキの子供は、湿地の明るい場所などの特別な場所でないとうちで成長できません。

●ハナノキと出会った植物たち ハナノキ湿地とその周辺には、様々な植物が生育しています。特に、ミカワバイケイソウ、ヘビノボラズ、ヒトツバタゴ、シデコブシはハナノキとともに絶滅が危惧される植物で、分布も岐阜県、愛知県、三重県に集中する大変ユニークなものです。このような分布を持ち、湿地とその周辺に生育する植物は「東海丘陵要素」と呼ばれ、15種類が紹介されています。そのほかにも、カザグルマ、コムラサキ、ササユリなどの希少な植物が生育し、多種多様な植物の貴重な生育地となっています。

●湿地の保全 ハナノキ湿地の保全を、開発計画に対する反対運動の歴史ぬきに語ることはできません。各地での市民団体の涙ぐましい努力によって、ゴルフ場や産業廃棄物処理場の建設計画をかるうじて減少させた結果、現在の数少ない湿地が残り得ているのです。現在残された湿地をより良いかたちで保全していくために、市民団体によるモニタリング(長期継続調査)や木道の設置、竹林の刈り払いなどがおこなわれています。

●ハナノキと人 ハナノキは人との文化的なつながりの強い樹木です。多くの巨木・老木が天然記念物に指定されており、ハナノキの葉を校章にデザインしている学校もあります。さらに、昔から人々はハナノキを霊木とするような何かを感じ取り、さまざまな伝承を残しています。その中の1つ、彦根天寧寺にはハナノキで造られたと伝えられる観音様がまつられています。その観音様には悲しい恋物語が秘められています。

●ワークショップ ハナノキを含むカエデ属は、プロペラのような形をした実をつけます。熟したこの実を空中に飛ばすと、植物が子孫を繁栄させるために進化させた工学的機能に驚かされます。ワークショップでは、プロペラ型の実を模したものを紙などを用いてつくってもらい、空中にとばし、いろいろとつくりかたを試すなかで、その洗練された仕組みを体感していただきます。(経間)



表紙の作品 / 大平小洲 春秋花鳥図屏風(右隻) 大正3年(1914) 紙本着色 114.6×324.8cm 本館蔵

大平小洲は、野池村(現飯田市千代)に生まれた南画家で、渡辺華山の長男で幕末から明治前期にかけて関東南画壇で活躍した渡辺小華に師事した。花鳥画を得意とし、渡辺華山-椿椿山-渡辺小華と受け継がれてきた花鳥画の伝統を伊那谷にも引き入れた。「春秋花鳥図屏風」は、画題として多く描いた鶏のモチーフを含む作品で、向かって右隻に梅花を主体にした春画題、左隻に秋草による秋画題を配している。